博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）　村尾　誠一

結論

於国瑛氏から提出された博士学位請求論文「源氏物語探求―物語のトポロジーとヒロインたちの栄華」について、論文審査と口述による最終試験の結果、審査委員会は全員一致して博士（文学）の学位を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。

なお、審査委員会は、村尾誠一を主査とし、副査として、源氏物語の研究者である電気通信大学教授島内景二氏、本学名誉教授で東京学芸大学教授沓掛良彦氏、学内の柴田勝二氏・鈴木聡氏の五名で形成された。

論文の概要

『源氏物語』という作品は、様々に論じられるにせよ、光源氏と紫上の愛の物語をその中核として捉えられてきた。しかし一方では、阿部秋生の先駆的な仕事をはじめとして、源氏の妻妾の中では唯一人当時の摂関家による外戚的な権力掌握の要である女子を出産した明石君の重さに注目する見方もあった。この論文は、後者の立場に立ち、独自な観点からこの物語の全体像を把握しようと試みた労作である。

この論文では、全体像把握のために「トポス」「トポロジー」という観点からの考察を導入した。さらに、女主人公の自己実現を「栄華」という言葉で把握し、栄華とトポスとの関係性から論を進めて行く。そもそも明石君は明石というトポスを冠して呼ばれ、その土地の蓬莱的神仙郷的な特性は、明石一族の栄華の基本になると考える。そして、それが物語全体を覆うものであると考察する。前編である光源氏の物語のみではなく、後編となる宇治を舞台とする光源氏の子孫達の物語でも同様だと考察する。この概念の導入と共に、源氏物語自体の和漢混在的な文化空間に対応するように、中国文学との比較文学的な手法を随所に用いて、その表現空間の特性を開示して行く所にこの論文の特質がある。特に白楽天の長恨歌の影響の強さには改めて光を当てることになる。

以下、本論を形成する各章の内容を簡単に辿る。

序章では、本論の操作概念である「トポス」「トポロジー」について議論する。「トポス」とはヒーローやヒロインを語る空間や場であり、それを探求する様々な理論回路を「トポロジー」と定義した上で、付随する問題を考える。第一節「物語の発生とトポス」では、物語発生以来の代表的なトポスとして羽衣型・白鳥処女型物語の「空」、浦島型物語の「山中・海上の他界」があることを示す。第二節「想像力と視線」では、主人公または作者が女主人公に至る想像力と視線を考察し、優美な女主人公を見る「垣間見」と対比して、特別なトポスにいる女主人公へは「寄りて見る」という視線の構造を考える。第三節「女性と栄華」では、物語の女主人公の課題を「栄華」と考えトポスとの密接な結びつきをいう。

第一章「『源氏物語』におけるヒロインの栄華の起点とトポロジー」では、首巻である桐壺物語から紡ぎ出されるヒロインの二つの系譜をたどり、明石君へ連なるそれの重要性を語る。第一節「桐壺更衣―『源氏物語』のヒロインたちの栄華の原点」では、桐壺更衣は愛を全うすると共に一族の期待を背負い栄華を遂げるヒロインの原点でもあることを指

摘する。第二節「桐壺巻と「長恨歌」―二つの系譜の「ゆかり」のスタートをめぐって―」では、二つの系譜が長恨歌の大きな影響のもとでスタートすることを明らかにする。第三節「栄華の起点としての場」では、源氏物語では栄華を保証するトポスとして「底」のある蓬莱山、海底のような含意を持つトポスを要請することを長恨歌を介在させて明らかにする。

第二章「『源氏物語』における明石一族の栄華とトポロジー―Ⅰ」では、明石が海底という底を持った蓬莱のようなトポスであることを明らかにする。第一節「若紫巻における明石君の噂話」では、明石の物語への登場が想像力により浮かび上がる霞の向こうの仙郷のような世界としてであることを示す。第二節「壺のトポスと複数の女性」では、明石への源氏の参入を中国の仙郷イメージである壺と重ねられることを示し、また、仙界の女性は複数いることを注意し、紫上・明石君が同時に登場する意味を述べる。第三節「明石のトポスと〈絵〉」では、明石と絵の密接な関連を蓬莱も絵で想像されることに重ねる。第四節「「海山」―明石の喩」では、明石を象る「海山」が蓬莱世界を語るイメージに重なることを実証し、さらに須弥山のイメージもともなうことを述べる。

第三章「『源氏物語』における明石一族の栄華とトポロジー―Ⅱ」では、明石君と光源氏との結びつきをトポスの観点から考察する。第一節「源氏の須磨行き」では、須磨で源氏が「山賤」と自称することにより明石君の父である明石入道と共振することを述べる。第二節「〈海〉に根ざす女―「海人」と「山がつ」」では、海山の地である明石で明石君は海に、入道は山に根ざすことで均衡が保たれる様を述べる。第三節「〈 海〉に入らぬ女―「山里人」」は、明石の君は入水する運命を持ち続けてきたが山里人に変容して源氏と結ばれる様を分析する。

第四章「明石一族の栄華とトポロジー―龍宮と浄土をめぐって―」では、蓬莱である明石は龍宮としての性格を持ち、明石一族は龍族としての性格も持つ。上京後に占める場にもそれは刻まれていることを証する。第一節「明石における明石一族と龍宮との交渉―海山・蓬莱・龍宮をめぐって―」では、明石が龍宮の性格を持つとともに明石一族が龍族の属性を持つことが探求される。第二節「明石の龍族と栄華―〈大堰山荘〉の場をめぐって―」では、そうした明石一族が上京して住む大堰山荘が蓬莱的であると共に龍族にふさわしい場であることを実証する。第三節「龍宮・浄土としての六条院と明石一族の栄華」では、六条院が蓬莱・龍宮の性格を持ち龍族である明石一族にふさわしく、また、そこは浄土としての性格も持つことが述べられる。

第五章「六条院と女性の栄華」では、栄華に到達した明石一族の様が分析される。第一節「六条院における源氏の栄華と四人の女性」では、六条院が蓬莱的な性格を持ち、明石一族にふさわしい空間であることが説明される。第二節「六条院入りの明石君」では、入内する明石姫君の母としての明石君の栄華が分析される。第三節「六条院におけるヒロインの栄華のあり方―「唐風」との接点を求めて―」では、六条院で栄華を実現した明石君を王者の象徴である「唐風」との接点で分析する。

第六章「「紫のゆかり」「宇治のゆかり」の栄華・救済とトポロジー―空・山・雲をめぐって―」では、紫上を中心とする「紫のゆかり」の女主人公、後編である宇治の物語の女主人公とトポスの関係を考察する。第一節「紫のゆかり」では、主人公の愛を受けるヒロインは男に先立ち火葬の煙となって空に昇る特徴を指摘する。第二節「「紫のゆかり」

「宇治のゆかり」―「聖主朝朝暮暮情」の受容をめぐって―」では、宇治の物語の女主人公「宇治のゆかり」も「紫のゆかり」を引き継ぐことを確認し、男達に魂を永遠に求め続けられる様を示し、長恨歌の影響も述べる。第三節「紫のゆかり」「宇治のゆかり」の行方―空・山・雲―」では、彼女たちの魂の居る空と男の居る地上との間のトポスとして山と雲に注目する。特に雲が両者の隔てとなると共に繋ぐ役割を持つ事に注意する。

第七章「後編における物語のトポロジーとヒロインたちの救済」では、物語の最後のヒロイン浮舟が明石君の問題を引き継ぐことを指摘する。第一節「宇治と宇治の姫君たち」では、主として大君が「紫のゆかり」の系譜を引き継ぐことを論じる。そして第二節「浮舟の受け継ぐもの―類同表現「入水」「出家」の形成」では、最後に登場するヒロイン浮舟が明石君の問題を受け継ぐことが、表現の類同に注目することで議論される。第三節「物語の終焉とトポロジー」では、明石君の栄華の主題を秘めたまま浮舟は雲のかなたの山に入り、匂宮との繋がりの持続と薫との断絶を指摘し、そこに懸けられた夢の浮橋に男が永遠に女を求める通路を象徴させて終わる。

終章となる「結びに代えて　夢の浮橋―「長恨歌」の蓬莱仙山の上に架けられているのか―」では、江戸時代初期の画家狩野山楽の長恨歌絵巻に見える橋が夢の浮橋であるか否かをめぐり議論し、長恨歌の源氏物語を介した日本の中世における受容の有様を考察し、源氏物語世界の文学史への残響をはかり論を閉じる。

<u>審査の概要及び評価</u>

近代における『源氏物語』の研究は時期毎にある主題に集約されがちであった。本文批判を中核とした研究から始まり、成立論・構想論・方法的人物論さらには表現論という各時代を主導する主題が変遷し、つい最近までは、「王権」という問題を意識化し、光源氏の王権掌握の光と影を基調に、この物語の構造を論じる王権論的研究が席巻する風潮が続いた。しかし現在は、研究者一人一人がそれぞれの問題意識に従い、いわば独自の観点から作品の全体像を把握することが課題となる研究状況を迎えつつある。

この論文は、現在の源氏学の最前線からの課題によく答えた論文であり、それが高い達成度でなされている。この物語の研究の発展に寄与できる学術的な成果として十分認められるものと我々は判断した。以下そのように判断した主たる根拠を簡潔に示しておく。

１，王権論に安住しない新しい視点が獲得されていること。上記のような研究状況にあるものの、王権論的な研究は物語の構造の説明しやすさと、多くの問題をそこから析出することを可能とする点で、すでに飽和的な状況にありながらも、依然と踏襲されることが少なくない。しかし、この論ではヒーローからヒロインに視点の重心を移すことで、王権の担い手のヒーローを相対化することを可能にしている。ヒロインへの注目は通俗的な女性論を基調とした人物論に堕する危険を持つが、ここでは「トポス」「トポロジー」という概念を導入することでそれが回避され、新たな視点の獲得に成功している。

２，「トポス」「トポロジー」という分析概念が有効に働いていること。この概念の構築に関して多少の疑義のあることは後述するが、明石君そして明石一族が、明石という特異な「トポス」を深く刻印することで「栄華」に到達し得るのだ、そしてそれは子孫たちにも問題として受け継がれるのだということが説得的に説明できている。

３，明石という「トポス」の「栄華」を約束する蓬莱的な性格の分析が説得的になされて

いること。こうした性格は、さらに明石一族が京都に上京し占める大堰山荘や、六条院という光源氏の到達世界を象徴する空間にも引き継がれ、さらには、後編の舞台となる宇治という空間にも引き継がれる様が説得的に分析されている。
４，源氏物語全体への長恨歌の影響が説得的に分析されていること。長恨歌の影響は主巻である桐壺巻をはじめ随所で指摘されるのはすでに研究上の常識であるが、この研究では、ほぼ一貫するこの物語への影響がさらに詳細に広範に分析され、上記の「トポス」の視点とともに、この物語の全体像を捉える上で有効に働いている。さらには、そうした長恨歌受容の後生への遺響も分析され、長恨歌の日本文学への影響という比較文学的な課題にも大きな問題の提示に成功している。
５，物語の全体像が独自な視点から方法的に捉えられていること。上記のように於氏の方法的な分析はこの物語全体に及び、特に、問題の多い結末部分に関しても注目すべき見解の提示となっている。薫・匂宮との三角関係から入水するものの山里に蘇生した浮舟の末路について、匂宮との関係の復活の可能性を示唆する視点は、口述試問でも議論となったが、この論文の論旨全体からは妥当に導かれるものであり、今後のこの物語の研究にも大きな示唆を与えるきっかけが獲得されている。
６，比較文学的な研究手法を自在に用い、膨大な中国古典を引用しながら論を進めて行くこと。長恨歌に関しては上述したが、他にも中国古典への論及は膨大であり、今までの研究では指摘されなかった作品との興味深い影響関係対比関係の提示ともなり研究上有益である。
７，研究史の厚い蓄積と日々生産されつつある現在の研究をしっかりと把握し、自己の論に取り入れながらも、そこから離陸を試みようとしていること。

以上の点は、源氏物語研究に寄与するととも和漢（日中）比較文学の研究分野の進展にも寄与するものと認められるであろう。なお、本人が日本語を母語としない留学生であることを考えれば、『源氏物語』のような長大な上に難解な作品を読みこなし、自在に論じること自体がすでに驚異と言う他はないのだが、そうした評価とは全く別の地平にある論文であることは上記で明らかであろう。蛇足ながら付しておく。

さて、言うまでもないことだが、この論文にも問題がないわけではない。以下問題とされる主な点についても述べておく。これらは、口述による試問でも議論された問題であり、そのことも含めて記す。
１，「トポス」という概念の構築とその運用についてやはり疑義が残ること。この主たる分析概念の有効性は上記の通り審査委員誰もが認めるものだが、この概念はともすれば歯止めの利かない拡大が生じてしまい、具体的な土地（地名）から「空」「雲」「山」という空間にまでも広げられることになる。このあたりの論理的な再構築がさらになされれば、より説得的でかつ豊穣な分析が可能ではないかという意見も示された。折口信夫などの提示する類概念の検討も必要ではなかったかという指摘もなされた。また、独自の定義がなされていて根本的な問題ではないが、西洋古典文学の研究でも「トポス」は重要な概念でしかも異なった意味で用いられていることにも注意を払う必要がある。
２，「トポス」という空間的な概念と「ゆかり」という通時的な概念の併用が問題を必要

以上に複雑化していること。「ゆかり」という主として女主人公の血縁や問題性の系譜をいう通時的な概念は、源氏物語研究では伝統的に重視され、本論の論述の上でも重要な役割を果たしている。しかし、主とした分析概念として「トポス」という空間的な把握を操作する上でその問題は有効に働かず、むしろ論を必要以上に複雑煩雑なものとするようにも働いてしまっている箇所もみられる。

３，全体像を捉える上で他の女主人公へ論及が不十分であること。紫上を中心とした源氏の愛を受ける中心である「紫のゆかり」という系譜にも言及されるが、概して分析が弱い。また、明石君と問題を共有できそうな玉鬘や六条御息所といった人物への言及が必要ではなかったかという意見も出された。また、女三宮と柏木の関係を中核とする第二部（源氏四十歳以後の世界）の中核世界への言及が必要ではなかったかという意見も出された。

４，中国の例が豊富なのはよいが、その妥当性の検証に甘さが見られ、また、論の流れをそうした列挙がかえって阻害する場合も見られること。膨大な中国文献の提示は研究上有益な情報だが、論を進める上での一つ一つの文証の分析が手薄であり、読者の理解に任す部分が多く、論の理解を阻害する場合も少なくなかった。列挙的な部分は注などに回し、重要な文証を徹底的に議論するといった進め方も必要であろう。

５，先行研究の豊富な摂取はよいのだが、引用が並列的であり、引用のための引用という箇所も見られること。古注と現代の研究とは分けるべきであり、『湖月抄』をはじめとする古注とはもう少し細やかな対話が必要であり、逆に現代の研究については、言及対象を選択し、論の提示に真に必要な質の高い研究との集約的な対話が必要であろうという指導も行われた。

６，日本語の表現力が不足すること。また、論文の体裁の整え方にも問題があること。日本語を母語としない論者ではあるが、これだけの研究を表現する以上、その日本語表現についてもさらなる配慮が必要である。また、極めて近い将来、日本語と日本文学を教授する職に就くことが予想される以上、この点については弁解の余地なく改善されなくてはならない。

なお、上記以外にも口述試問では、光源氏の存在が相対化され過ぎていないかという疑問、物語で重要な役割を果たす「夢」に対する分析をさらに行うべきではないかという点、「栄華」という自己実現の規定への疑問、さらには登場人物達の人間的な成長を分析するためのもう一つの視点の獲得への努力といった点に関しても批判と提言がなされた。

上記の問題に対する口述試問での受け答えも適切になされ、論の不足部分に関する自覚も十分なものであった。問題点はそれぞれ重要な反省点ではあるが、成し遂げられた成果の学術性を否定するものではないのはいうまでもない。よって審査委員会では全員一致して、最初に述べた結論に達した次第である。